

大天使は弓をつがえ、
月を落とす

シドウユヤ

1、告白（罪と愛） -1

学校の七不思議のひとつに、チャペルの天使様がいる。

悩んでいた生徒がチャペルで祈っていたら、天使様に会ったのだそうだ。無性の美貌と白い雙つの翼をもった天使様で、彼に伝道をもたらしたらしい。実際どんなことをしてくれたのかはよくわかってない。大体、その生徒がなにで悩んでいたのかもよくわからないみたいで、天使様が現れたっていう話だけが、伝わっている。

夕方になると、神父さまもお帰りになり、そのチャペルは無人になる。あたしは一人で、チャペルへむかって歩いていった。校庭は夕陽に染まっている。

もうすぐ終わる夏の、夕暮の太陽の色が好きだった。なんだか懐かしい色で、色々なことを思い出す。そんな気持ちに浸るのが、好きだった。

ゆっくりとチャペルの扉を押して開ける。

夕陽の赤い光に当たって、ステンドグラスが美しく輝いていた。中の空気はなぜかひんやりとして神域を感じさせる。別の世界に踏みこんだような気さえした。

学校にチャペルはあるけれど、ミッション教育があるわけではないのでここ来る機会はあまりない。1クラス分が入れる程度の小さなチャペルだし。

でも、こんな雰囲気は素敵だな、と思った。

真正面にある十字架上のイエスさま。その背後にあるステンドグラスは、大天使ミカエルの姿だと聞いた。

きれいはいきれいなんだけど、あれが学園の七不思議で言われている天使様なのかと思うと違うような気がする。だって、神々しくてもステンドグラスにいる天使様はひらべったい。

生徒の前に現れた天使様は、まさかひらべったくないだろう。

あたしの前にも、現れてくれたらいいのに。

小さくため息をつくとき、あたしは椅子に座ってステンドグラスを見た。

しばらくぼうっとしていると、チャペルの戸が開く。こんな時間に人が来るなんて、と思ってふりかえると、それは長尾先輩だった。

すごい偶然だ。長尾先輩は去年の生徒会のメンバーで、あたしは今年度、生徒会に参加しているので、よく顔を合わせている。……実を言えば先輩はあたしの憧れの人だ。呼び出したわけでもないのに、こんなところで二人きりになるなんて出来すぎてる。

心臓が、とくん、と鳴った。

「あら、先客か」

先輩も、人がいたのを意外に思ったらしい。あたしは立ち上がって、先輩を見た。

「先輩、どうしたんですか」

逆光でいまいち、先輩がどんな表情をしているのか見えなかった。けれど、いつもの先輩の様子と変わらないようだ。入って来たとき、なんとなくいやな感じがしたから先輩が怒っているのかと思ったのだけれど。先輩は落ち着くためにチャペルに来たのかも、と考えたくらい。

「なんだ、乾か」

先輩はあたしを見て苦笑いした。

「入ってもいい？」

先輩は言って、足元を指差した。別に、いいとか悪いとか言うことじゃない。あたしはうなずいた。先輩は、あたしのすぐ傍まで来て立ち止まった。どきどきする。

今度は、先輩があたしになにをしていたのか聞く番だった。

「乾はここでなにをしていたの？」

「特に。ぼうっとしてただけですよ」

「なにかお祈りでもしてたのか？　ここってジंकスあるからな。ステンドグラスの天使様に愛と罪の告白をして祈ると、願いが叶うってやつ」

先輩はおかしそうに、笑ってる。あたしが聞いた七不思議の話とは少し違った。愛と罪の告白？

なんだか心を読まれているような気がして、落ち着かなかった。先輩は物事に鋭いほうなので、あたしが彼を好きだっていうこともばれているんじゃないかなって思ってたんだけど、こんな風に言われるっていうことは、それでも、ないのかな。それとも、わかってて、聞いてくるのかな。

よく考えたら、これって絶好のチャンスに違いない。

けど、いくら夕暮れのチャペルで二人きり、なんて出来すぎたシチュエーションでも、いきなり告白する勇気は出ない。そんなつもりじゃ全然なかったし。

「……そうなんですか？　あたしは、ここに天使様が本当に出るって聞いたんですけど」

「へえ。そういう話もあるんだ。神村と相川がくっついたのって、神村のお祈りのせいだって聞いたけど」

「神村先輩が？」

神村先輩はやっぱり去年の生徒会のメンバーだったから、もちろん知ってる。そんなに親しいわけじゃないけど、チャペルで祈ったなんて聞いたら思わず笑ってしまう。男の子ならなおさら、あまり見られたくないだろうし、自分からも言ったりはしないと思うんだけど。聞きちゃっていいのかな。

「うん。冗談だったのかな。騙されたのかもしれないし。あ、俺が言ったって、言わないでよ」

「言いませんよ。神村先輩に直接なんて、聞けないし」

「だよな。いくらあいつでもさ」

……なんか、変だな。先輩が、すごく近い気がする。チャペルの通路が狭いせいかな？　意識したら、急に鼓動が早くなって来た。やっぱり先輩、あたしが先輩を好きだってこと、気づいてるのかな。それでこれだけ近いって言うことは、告白してもいいってことなのかな。

先輩の顔を見ていられなくて、少しうつむくと先輩の襟元が見えた。熱いからか、制服のネクタイを緩めている。……先輩って、こんな風に着崩して制服を着たりしないのに、珍しい。

しかもそれがカッコいいから、いてもたってもいられない。

あたしは何気なく話題を続けるようなふるまいで、先輩の傍を離れた。祭壇のほうに近寄って、ステンドグラスの天使様を見上げるふりをした。

告白するなら、迷ってる暇なんか、ないよね。いつだれが来るともわからないのだし。でも、なんて言ったらいいのかな。ああそうだ、先輩が言ってた七不思議の話。ええと、愛と罪の告白をするとかって言ってた。愛と罪？　なんか、変なの。

そうすると願いを叶えてもらえる？

「愛だけじゃなくて、罪の告白もしなきゃいけないんですか？」

あたしはそう聞いてみた。愛の告白って言うなら、わかる。「あの人が好きだから結ばれたい」とかね。

でも、罪の告白って一体なんだろう？　一体なんの罪を告白すればいいんだろう。なんでもいいの？　それとも、好きな人への罪を言わなくちゃいけないのかな？

先輩は静かに応えた。

「罪のない人間なんかいないだろ」

罪って、なんだろう。そんなこと考えたこともなかった。それからふと、チャペルの中はずいぶん涼しいな、とあたしは思った。冷たい風なんか吹いていないのに、背筋がぞっとする。

話題に困って、あたしはイエス像の前で硬直してしまった。立ち去るのも変だし、どうしようと思っていたら、先輩がからかうような口調で言った。

「乾は、お祈りしてみないのか？」

「あたしですか？」

もしかして先輩は、お祈りをしに来たんだっただけかな。あたしがいたから、出来なかったけど。邪魔だったかな。

そう考えると苦しい。やっぱり、先輩が好きだなんて、簡単に言えない。

それからあたしは振り返ったんだけど、どうしても頬が引きつった。

「そうだな、あたしもお祈りしてみようかな。ほら、先輩と幸せになりたい、とか」

冗談ぽく言ったのだけれど、どうかな。

先輩はにこりと笑った。それから真面目くさった顔をして、あたしのほうに近づいて来た。

「こういうジンクスはないのかな。このチャペルでキスをすると、二人は死んだ後も永遠に引き裂かれることはないとか……さ」

そう言って、先輩はあたしの前に立った。やっぱり背が高い。肩幅のがっしりとした体の、崩した襟元を、あたしの視線はさまよった。それ以上見あげると、まともに先輩と目が合ってしまう。それはさけたかった。

「乙女」

彼は淀みなくあたしの名前を呼んだ。先輩、あたしの下の名前って知ってたんだ。それだけではっとしてあたしは先輩の顔を見上げ、その結果として目が合った。

先輩はゆっくりと接近して来る。どうしていいのかわからない。こんないきなりの展開って、ありなんだろうか。先輩はやっぱり、あたしが先輩のことを好きだって知ってるのかな。それで、これって、先輩もあたしのことを好きだって言う意味なのかな？

くらくらする。まだ、キスもしてないのに。どうにかなっちゃいそう。

だって、キスしたら永遠に引き裂かれることもないなんて、そんないきなりすぎる。先輩のこ

とは好きだけど、気持ちを確かめてないし。……って、そういうことじゃないよね。

先輩の両手が、あたしの肩に優しく触れた。そして唇の端に、先輩の唇を感じた。チャペルの空気みたいに、少し、冷たい。

キスするんだ、そう思って体から力が抜ける。先輩の手があるから、それでも平気。……そう思ったとき、けたたましくあたしを呼ぶ声が聞こえてきた。

「乙女ー！」

高めの声で、あたしを呼んでる。そして、静かなチャペルのドアを遠慮なく開けてくれた。

「おい、乙女。ここに……いや、ごめん。ほんと、失敬」

見ないでもわかるけど、チャペルの扉を開いたところにはあたしの幼馴染が立っているはずだ。孝介があたしを探していた理由はわかっている。

今日は、稽古の日なのだ。あたしと孝介は、小学校の頃から一緒に弓道を習っている。ついでだから、いつも待ち合わせて一緒に行っている。

先輩はぴたりととまり、見る見る顔をゆるませて、最後には顔を背けて大笑いし始めた。

……いくらなんでもひどくない？

孝介はすっかり呆れてる。先輩は、なんとか笑いをおさめて、立ち尽くしている孝介の傍まで行って、ぽんぽんと肩を叩いた。

「いや、俺こそ。乾も俺をからかうからさ、ちょっと俺も悪ノリしちゃっただけだから。かすっただけだし、安心しろよ。チャペルのジंकスって言うのって、乙女心をくすぐるだろ。ほんと、悪かったな、ごめん高宮」

孝介ははあ、と気のない返事をした。邪魔をしたことを本当に悪いと思ってもいなさそうだ。「俺はこいつが先輩にゴーカンされようと先輩にオモチャにされようと構いませんけど？俺は、稽古に行く時間に遅れるっていうのを言いに来ただけで」

孝介の性格なんて、長い付き合いだからわかってるけど、そういう言い方はないと思う。もう少し反省した態度を見せてほしい。

「そう、なら急いだほうがいいんじゃないのか。じゃあ、また。適当なジंकス、探しておくよ」

そう言って先輩は、チャペルを出て行った。ああ、ああ、ああ、もう、タイミングが悪すぎる。それに適当なジंकスって。先輩があんなこと言うなんて思ってもなかった。適当って、適当って、ひどすぎる。

先輩を見送った孝介は、顔を真っ赤にして立ち尽くしているあたしを見て、まじめな顔で言い放った。

「なあ乙女。……笑っていい？」

いいわけないんだけど、もうなにも言えない。孝介はしゃがみこんで、大爆笑をはじめた。もう、腹が立つ。

「孝介、急がないと遅刻するって言いに来たのは、あんたでしょ！」

「ヒーヒー、いや、俺がもう少し笑うくらい時間はあるだろ、ああ、ほんと、おかしい……！」

おかしくなんかないわよ、ちっとも！

毎週水曜日の五時から七時まで、あたしたちは家の近所にある弓道場に通っている。孝介がはじめた弓道で、誘われてあたしも習うようになった。あたしはそんなに上達しなかったけれど、孝介は今年のインターハイにも出られそうなくらいの腕前になってるって話だ。あたしと孝介は本当にただの幼馴染で、恋愛感情なんて少しもない、兄弟みたいなものだ。

孝介はあたしに教えてくれるふりをしながら、楽しそうに聞いて来た。

「結局さあ。あの人、わかってないのか」

どうして、たかが幼馴染の孝介が、あたしが先輩を好きだってこと、知ってるんだろう。教えてたつもりはないのに。

「なにを、よ」

今日はひどく不調だ。近的の的にすら、かすりもしない。もう五本も射ているのに、一本も当たっていなかった。孝介はこっちを覗きこんで来るけれど、きりきりと弓をつがえて、あたしはもう一度、射た。孝介は勢いにおされて数歩さがる。

「危ないな、人が近くににいるのに」

「じゃあ遠ざかればいいでしょ」

「いらいらするから当たらないんだろ。力がはいりすぎて、肘も曲がってるし、背筋もぶれてる。当たるわけない」

「うるさいわね」

「で、長尾先輩はおまえが先輩のこと好きだって、気づいてると思う？」

どうにもその話をしたいらしい。気分は最悪だった。こんなんじゃ矢が当たるわけがない。思い出させないでほしいかった。

「うるさいってば」

「人がせっかく心配してるのに。今日だって、俺が行かなかつたらなにをされていたか知らないぜ。二人っきりで他にだれもないチャペルなんてさ。あのまわり、人も来ないじゃん」

大笑いまでしたくせに、よく言う。あたしはじろりと孝介をにらんだ。

「……ゴーカンされたって構わないとか、言ったくせに」

「別におまえがいいんならいいけど」

いって、どうなのかな……そりゃああたしは、先輩のことが好きなんだし。でもいきなり、あんなふうにキスされそうになるのなんて考えてもなかった。その先なんて、ちょっと想像できない。

けど、先輩はどういうつもりだったのかな。あたしが先輩を好きだってことは、気づいていると思う。けど、先輩は？

あたしは、さっきの先輩の行動がいまいち、計れていなかった。長尾先輩は軽い人じゃないし、今まで彼女がいたって話も聞かない。わりともてるのは知ってるけど、男の子の友達というほうが好きなタイプに見える。下品な話をしてるのは、聞いたことないし。いつだって、優しいし。

だから、いきなりあんなことがあったのはすごく驚いた。

あたしがちゃんと告白したらまじめに返答してくれる人だと思ったのに、あんな冗談で好きって言うだけでキスなんて普通、しない。

露天の道場には、涼しい風がふきこんでくる。あたしは弓を下ろして、空を見た。少し落ち着いて、気分を変えたい。的にむかって右手側に、まだほんのりと夕陽のあかりが取り残されていて、そのあたりに月が浮いていた。ほとんどまんまるだ。

それを見ながら、あたしは先輩のことを思う。先輩には、淡い紺色がよく似合うと思う。こんな時間の真上にある空の色だ。うちの制服の色も同じで、先輩が着るととてもかっこいい制服に見える。

孝介は、いやな感じで笑った。

「いいのかよ、このまんまで。次に二人きりになるとき、恐かったりとかしないのか？」

「先輩はそんな人じゃない」

さっきから、孝介もひどい言いようだ。そりゃあキスは面食らったけど、先輩があんなところで押し倒したりするような人じゃないって言うのは、信じてる。

「わかんないだろ。男なんてそんなもんだよ」

孝介はいやに知った顔だった。先輩のこと、よく知ってるわけでもないのに。むかついたのであたしは、孝介に言ってやった。

「あんた、ゴーカンでもされたことでもあるわけ？ あってから言ってよね」

「そりゃあないよ。でも俺は夢見がちな乙女よりは進んでると思うぜ。長尾先輩のあの言い訳はどうかと思うけど？」

適当なジंकスっていう先輩の捨て台詞が、あたしだってものすごく引っかかっている。

「そんなことない。今日の先輩は、いつもと違ったの」

「それは、おまえの思いこんでた先輩と違ったんじゃないか？」

あたしはその言葉に硬直し、孝介を見た。いやな感じ。まるで、あたしが先輩のことちゃんと見てないみたいじゃない。けど、すごく痛いところを突かれた気がする。

「凶星だろ」

ふふん、と孝介は笑う。

「な……なんだって言うの」

孝介は口元を歪めると、遠的の方に移ってしまった。そして、凛々しい姿できれいに弓を引き、見事に一発で中心近くを射抜いてみせた。ほんと、嫌味なやつ。自分だって好きな子と付き合いえてないくせに。

的はほとんどまんまるで、月と同じ形をしていた。

先輩と次にいつ顔を合わせられるかなと思って考えたけれど、一番ありそうな生徒会室じゃ、気まずい。他にも人がいるんだから。先輩をわざわざ呼び出すのもどうかと思うし、結局、あたしは次の日も放課後のチャペルへ足を運んだ。

昨日と同じ時間だった。暮れていく夕焼け空が、胸に痛い。

晩夏の太陽は強烈だと思う。頭が、搾られるように痛くなった。感情がすごく昂ぶっている。先輩にまた会って、あたしはどうしたいのかな。昨日の続き？ それより、きちんと好きだって伝えたほうがいいのかな。

あたしは怖いと思いながらも、長尾先輩とのことがいくらか進展するのに期待していて、それよりはるかに……失望しているらしかった。

孝介が言ってることに流されるわけじゃないけれど、昨日の先輩の態度は誠実さに欠けてると思う。あたしが見ていたのは、ああいう先輩ではなかった。あんなことするなんて、あんなこと言うなんて、思ってなかった。

いつも優しくて包容力があって、親しみやすく、スポーツマンで、頭もけっこうよくて、まるでお兄さんのような先輩が好きだった。

よくよく考えたら、あたしが考えているような理想の人間なんて、いるんだろうか？

本当にむかつくけど、孝介は間違っただけを言ってない。

チャペルには今日もだれもいない。足を踏み入れると、首筋がちりっと痒くなった。静かで、涼しい。

あたしはステンドグラスの天使様を見た。

金髪に青い目、白い裳裾の衣と純白の雙翼で、手に弓と矢を握っている。昨日見たときほど、作り物っぽくないと感じた。少なくとも、あたしは真摯に祈りたいと思う。そうしたら、いまにも神様が魂をふきこみ、はばたきそうだ。

ここで祈ったら、天使様は現れて、導いてくれるんだろうか？ それとも、愛と罪の告白をしたほうが、いいんだろうか？

けど、愛の告白ならできるけど、罪の告白なんてなにをしたらいいのかわからない。もちろん、いいことだけして生きてるわけじゃないけど、罪っていうのはもっと重たいものだと思うから。

罪ってなんのことなんだろう。神村先輩は、どんな罪の告白をしたんだろう。

がたん、と音をたてて扉が開いた。開けたのは、予想どおり、長尾先輩だった。先輩はにっこりと笑う。

「やっぱり来たね」

先輩、あたしがここに来ると思ってたのかな。昨日の続きのために？ あたしは、なにをしにここに来たのかわからなくなっていた。先輩に会いたかった。でも、天使様にも祈りたかった。

「先輩も、来たんですね」

そう応えると、先輩はうんとうなずいた。

「今日は、高宮は？ いないのか」

その台詞に、あたしはなんとなく身構えた。どういう意味だろう？ 今日は、邪魔する孝介は
いないっていう意味なのか、それとも別の意味？

先輩は、あたしのことをどういうふうに認識してるんだろう？ 先輩のことを好きだと知っ
ているのか、それとも孝介と仲がいいと勘違いしてたりするんだろうか？ 昨日の帰り際のセリフ
では、すっかり誤解してたみたいだけど。

「昨日はごめんね。今日はなにをしに来ていたの？」

先輩に会うため、とはさすがに言えない。先輩は、優しく笑った。

「天使にお祈り、した？」

愛と罪の告白のことだよ。あたしは首を振った。

「いいえ。まだです」

「やってみたら？ 本当かもしれない。神村に確かめてみたら、マジだったから」

先輩は、どういうつもりでいるんだろう。あたしのこと、からかっているのかな。そんな人じ
ゃないと思いたいけど、今日も軽くあしらわれている気もする。

好きだ、ときちんと伝えても、ちゃんととりあってくれるのか少し不安だった。

いままでは、自分に告白する勇気がないってことでためらってたんだけど、今日は違う。あた
しは本当に先輩が好きなのかな？ 昨日みたいなことを言われて、それでも好きなのかな？

先輩の、かすかに触れた唇を思い出す。そういえば、ひんやりしていた。想像してたのとは、
違った。

やっぱり、なにも言わないほうがいいのか。

ぜんぶ冗談だってことにしておいたほうが、いいのか。

「もし乾に好きな人がいるんだったら、祈ってみるといいよ。天使は、きっと乾の願いなら聞き
届けてくれる」

先輩は、そう言った。また首筋がチリッとする。

先輩のその言葉は、とてもまじめだった。昨日の軽い調子が信じられないくらい。とても優し
くて、そして、少しだけ寂しそうだった。……天使様に祈るより、いまあたしも真摯に、先輩に
言うべきだという気がした。先輩が、好きだって。

そうしたら、天使様だって聞き届けてくれるに違いない。

意を決すると、あたしは先輩を見つめた。

「あたし……昨日からすごく考えてたんです。昨日の先輩のこと、すごくショックだったから。
でも、ショック受けている自分はおかしいなっていうのも、思ってた。あたしは先輩に、自分の
勝手な理想を押しつけてるだけなんじゃないかなって。それだったら、あたしも先輩のこと責め
たり出来ないと思ったんです。先輩のこと、変だって思うのはおかしいって」

そう言って長尾先輩を見ると、彼は首をしめられたような苦しげな表情をしていた。

一瞬、こんなこと言わなきゃよかったって思った。先輩のことを責めているようにも聞こえる

。

けれどももう止められなかった。いま引きさがったら、それこそ後悔する。言っても後悔するだ

ろうけど、先輩の目を見たらもう止まらなくなった。

煮えたぎる水のように、気持ちだけが先走っていった。止めなきゃ、とも思うし、頭のどこかでだれかが「それは疑いなのか？」ってささやくのが聞こえた気がしたけど、言い始めてしまったのに、ここでやめられない。

先輩の目が、あたしをじっと見つめてる。

「先輩、あたしは先輩が好きなんです。わかっていたんでしょう？」

そのとき。

スタンドグラスから、外のまばゆい閃光が射しこんで来た。チャペルは一瞬、すべてがまっしろに光ったようにも見えた。……錯覚かもしれないけれど。

あたしはその眩しさに、思わず悲鳴を上げた。光はまるで紫外線のきつすぎる真昼の陽光そのもののように、目を射抜く。しばらくは視力が戻らず、あたしはまばたきをくりかえした。目が痛い。

どこからの光だったんだろう。もう、夕暮れなのに。

あたしは天使様のことを思い出す。

まさかこれは、天使様の光なんだろうか。本当だったのかな、チャペルの天使様の、愛と罪の告白の話……

じゃあ、天使様が出現するという話は？ 伝道をもたらすという話は？

よくわからない。

あたしは、白い光のなかに先輩を見失っていた。あわてて先輩を探す。どこだろう。まだ眼がちかちかして、よく見えない。

「乾？」

先輩のほうから、あたしを呼んで肩をつかんで来た。いままで気配がなにもなかったと思っていたところに先輩がいて、あたしは必要以上に怯えて声を上げた。

「きゃっ」

「そんなに驚くなよ」

「あ、ううん、いえ……いまの、なんですか？」

「さあね」

それからあたしたちは、光源を求めてチャペルの外を見て回った。けれどなにも見つからず、またチャペルの中に戻った。

「頭がくらくらする。……すごく、しんどい、」

先輩はそう言うと椅子に座った。建物の中は、また夕闇の色に染まっているし、スタンドグラスの天使様も動きだしてはいない。天使様かも、と思ったのも七不思議に毒されちゃっただけで、偶然なにかが反射して光っただけだったんだろうか。それにしても、すごくまぶしかったけど。

「なんだったんだろう、あれ」

先輩はそう言う。あたしはちっともわからなくて、首を振った。

「さあ……」

「天使だったのかもな、君は、恋と罪の告白をしたから」

そうだった、妙な光で忘れていたけれど、先輩に好きだと言ったんだった。あたしはいまさらのように照れると、先輩のいくつか前の椅子に座った。後ろから聞こえてくる彼の声は、落ち着いて澄んでいた。

「乙女、……ありがとう。そう、君の気持は前々から知ってはいたよ。昨日はからかってごめん。あんなところ、人に見られるとは思ってなかったから。しかも、君と仲のいい高宮だったしね。変なことを言っちゃった。

ありがとう。俺も君が好きだよ」

すごく嬉しいのに、急に胸がつかえて、あたしはその言葉に答えることが出来なかった。いまさら、ためらうことがどこにあるというんだろう？ 振り返ったけど、立ちあがれない。鼓動が高鳴って、苦しい。

長尾先輩はやおら眉を歪めてここは空気が悪いと言った。

そして立ちあがると、沈黙したままのあたしを置いて、出て行ってしまった。開かれた扉から、潮の匂いが忍びこんで来る。

うちの学校が海に近いとはいえ、こんなに濃い潮の香りがするのは少しおかしい。今日は風が強いわけでもないのに。

あたしはぼかんとして、先輩の出て行った扉を見ていた。……置いてっちゃうって、ひどくない？ これじゃあ昨日とあまり変わらない。先輩はあんなに優しい声で好きだと言ってくれたけど。

急にどうしたんだろう。追いかけたほうがいいのか。

あたしはチャペルを出ていこうとして、はたと床に残る濡れた足跡に気がついた。先輩の？ まさか、濡れるような水はないし、かといってあたしたち以外にはだれもいなかったよね？ じゃあどうしてこんなところに？

さっきの光と、関係でもあるんだろうか。

磯の香りは、その足跡から香っている。これは、だれの足跡なんだろう。

どうにもわからなくて、とにかくあたしも出ようと思った。

チャペルを出るとすぐに、外の熱気に包まれる。気持ちが落ち着かないのは、この熱い空気のせいなんだろうか？

夕陽に、影が長い。

長尾先輩、どこに行ったんだろう。

2、海で（落花のこと） -1

早く帰ったほうがいい、ということはわかっていたのだけれど、やっぱり先輩のことが気になった。好きだって言ってくれたのは嬉しいけど、じゃあつきあうとか、そういう話にはならなかったし、少し様子もおかしかった。

.....様子がおかしかったのは、昨日からのことかもしれないけど。

先輩のあの言葉は、本当だったのかな。

先輩がどこに行ったのかなんてわからなかったから、なんとなくさっきからの潮の香りに誘われて校門を出た。月は真ん丸だから、今日が満月かな。月を見上げながら、あたしはついつい学校から二十分も歩いて、浜辺に出た。

繰巢浜は学校から一番近いところにある砂浜だけど、遊泳禁止だし、狭いからあまり人は来ない。

海は夕陽の照り返しで暗い赤にかがやいている。空の端はあたしの好きな、先輩に似合うあの紺色になっていた。

海なんだから、潮のにおいがするのは当たり前で、あたしはなにを追いかけてここに来たのか、わからなくなってしまった。でも足元を見ると、砂浜の上に濡れた足跡が続いている。そこからは、はっきりとわかるほどの濃い磯の香りがしていた。

まさか、と思って目で足跡を追って行くと、その先には先輩らしい人影がいた。

海の暗さに、いままで先輩の姿も紛れてしまっていて気がついていなかったみたい。

先輩は水際に立ち、前のめりになっていて、いまにも海に飛びこんでいきそうだし、倒れそうなのかもしれない。

それじゃあなんで、こんなところに来たんだろう。

「先輩！」

あたしは彼を呼んで走りだした。

「先輩、危ないです！」

「乙女」

先輩はあたしを見たけれど、夕陽の逆光のせいだけではなくて青白い顔をしていた。

「先輩、気分悪いんじゃないですか？ 平気？」

「平気じゃないよ.....」

絞るような低い声は、彼がひどく具合の悪いことを示していた。

「とにかく、どこかで休まないと」

そうは言っても、そこは砂浜だったし、これといってなにもない。すると、先輩が言った。

「そっちの.....後ろに、カバーのかかったボートがあるんだ.....それを.....」

「あ、はい」

先輩がなんでそんなことを知っていたのかわからない。あたしが必死に探すと、ボートは半ば砂に埋もれてそこにあった。

とりあえずボートの上に並んで座ったけれど、先輩はひどく具合が悪そうで、いい加減真っ白

になった顔をあたしの肩にうずめるようにした。先輩からは、潮の香がする。海から上がったばかりのように濃いけれど、そんなのは不自然だ。

いくつもいくつも汗が流れ落ちていくのに、先輩の体はひどく冷たい。どうしたっていうんだろう。

「やっぱり、海に出ないと……」

先輩がそう呟いた。苦しげに開いては閉じる目は、波の揺らぎを見ているようだ。

「なんですか？」

あたしは、なんですか、というよりも、その言葉が理解できなくて尋ねた。こんなひどい状態で、海に出るなんてどういうつもりだろう？

先輩はどこかおかしい。

「乙女、このボートを出してくれないか。カバーをとって、そっちに……持って行って」

「先輩、なに言ってるかわかってるんですか？」

「いいから」

言うと、先輩は無理矢理あたしから身を離して立ちあがる。

「先輩、どこに行くんですか」

「早く」

あたしは仕方なくボートからカバーを剥がし、ひっぱって海辺まで運んだ。先輩の言うままに、オールを備えつけ、そして船を水に浸ける。先輩はふらふらとその中に倒れこむように座り、あたしに船を押しださせ、もちろんあたしは先輩を一人にするのが不安で乗りこんだ。

あたしは泳げないのでいくらか不安だったけれど、まさかひっくり返ることはないだろう。たぶん。

しばらく、先輩はなにも言わず、苦しそうに目を閉じていた。

ボートは少しずつ波に流され、少しずつ浜から離れていく。

夕焼けが暗黒に飲みこまれていく。

「オール、漕いでくれる？」

「あ、はい」

あんがい力のいる作業を続けながら、先輩を見ると、右手を水に浸して瞑想していた。やっぱり、紺の色は彼によく似合う。空に、満月の映える美しさがなんとも言えない。

疲れてオールを置くと、先輩は目を開けた。

「ごめん。疲れたろ？」

「いえ……」

否定しながらも、息が上がっていたので説得力はなかったように思う。

「もういいよ。元気になったから」

「そうですか？」

先輩の顔は青いままだ。けれど、確かにさっきのような苦しさは見えないから、いくらか回復したんだろう。

「交替するよ」

どこまで行くつもりなんだろう。傍には先輩もいるし、ボートに乗っているし、怖いことはないはずなのだけれど、周りを水に囲まれているのはぞっとしない。

この繰巢が遊泳禁止なのは、しばらく続く浅瀬から急に深く落ちこむために、危険だからだと聞いていた。まだ浅瀬にいるのならいいのだけれど、ずいぶん漕いだはずだから、怖い。

「あの、あたし泳げないんです」

そう言うと、先輩は気にした様子もなく返事をする。

「そうだったの？ なら、来なくてもよかったのに」

「さっきの先輩を一人で乗せたら、一ヵ月後に干涸びた死体が見つかりますよ」

こんなに心配しているのに、ひどい言い方だ。あたしがむっとして言うと、先輩は吹き出す。

「それはないと思うけど」

「そうですか？」

「海に来ると、元気になるから。」

……放っておいてくれたほうがよかった」

「なに言ってるんですか！」

先輩はあたしの剣幕に気づいたのか、首を傾けて微笑んだ。

「ごめん。投げやりな意味じゃないんだ。心配する必要はないんだと言いたかったんだよ。もう、平気に見えるだろ。海に出れば楽になるんだ」

「まだ、いくらか顔色が悪いです」

あたしは食い下がったけど、さっきより回復していることは確かだった。先輩はありがとう、と小さくつぶやく。船はゆるりと揺れながら、暗くなってゆく海にさまよっている。いまどこにいるのか、あたしにはわからなくなっていた。

「話をしようか」

急に先輩はそう言うと、空の月を見た。

「俺の下の名前ってわかる？」

「え……と。漢字は、知ってるんですけど、なんて読むんですか？ 立つ果実、ですよ」

「そう、リッカと読むんだ。立果さ。実をなすべく立て、というわけだよ。」

縁起のいい名前に見えるよな」

「そういえば、そうですね」

先輩はゆっくりとため息をついた。まるで告白をするためのよう。

「ところが違うんだよ。」

俺には、姉がいたんだ。俺よりふたつ年上のはずで、俺が母さんのお腹にいるときに死んでね。名前を、真実の花と書いて真花、といたんだ。それで、真花は死んだから花が落ちて落花、らっかの次はりっか、で立果なのさ。ひどいだろ」

心臓が苦しかった。なんでこんなに苦しいのだろう。昨日からずっと、不安な気持ちが胸を渦巻いてる。先輩に告白しても、先輩に好きだと言われても、消えない。もっと浮かれたっていいはずなのに。

名前のこと、お姉さんのことは先輩の告白に聞こえた。

それは、先輩のために愛と罪の告白をした、あたしだけにむけられたものだったから。

どうして先輩はいま、あたしにそんな話をしてくれる気になったんだろう。

「でも、立つっていう字、先輩らしくて好きです。ずっと伸びた感じで、あたしの好きな、先輩らしいから」

「ありがとう」

先輩は苦しそうに微笑んだ。そして手を延ばして、あたしの手を握る。

聞こえるのは、波の音だけだ。岸から見える丘に、家々の灯が見える。

――もしかして、先輩が昨日チャペルに来たのは、愛と罪の、あの告白をするためだったんじゃないだろうか。今日、あたしの前でしたようなことを言おうとしていたのではないだろうか。

でもそれを、あたしが聞いてしまった。

昨日あたしが、チャペルにいたから。邪魔をしたから。

「……先輩」

「なに？」

「昨日、どうしてチャペルへ来たんですか？」

「君がいたからだよ」

そんなわけではない。だって、先輩はあたしがいることに驚いていたじゃない。

心臓が震えるのと――それは、先輩の言葉にときめいたからだし、おびえたからでもあった――先輩があたしを引き寄せるのは同時だった。船が大きく揺れてあたしは先輩にしがみつき、あたしたちはキスをしていた。

こんなところに孝介は来ないし、あたしはどうしたらいいのかわからなかった。

先輩の唇は冷たい。

「先輩？」

離れてあたしは、先輩の嬉しそうな顔を見る。本当に、嬉しそうだった。

不意にそこにいるのが怖くなった。海が怖いんじゃなくて、先輩と二人きりであるということが。それは別に、孝介が言っていたみたいに、自分の貞操のこととかではなく、もっと深い、海の中に沈められるような怖さだ。

先輩が、あたしを好きでキスをしてくれたことくらいはわかる。でもそれが、なにか、おかしいのだ。

「乙女。天使は、悪魔に魂を売りたいという願いをかなえらると思う？」

「どういう意味ですか」

彼は満足気に笑った。それが先輩の望みなんだろうか？ 天使様に告白してそんなことを言おうとしたの？ まさか！

「目を閉じて」

そう言われて、あたしはとにかく目を閉じた。怖くて、これ以上先輩の笑顔を見ていたくなかったから、素直に応じたのだ。そうじゃなかったら、目なんて閉じなかった。

強い潮の香がして、彼はあたしの問いに答えを言うつもりだろうと思っていたのに――なににもなかった。なにもなく、あたしはとうとう目を開けた。

そして、ボートの上にはなにもなくなった。

海の真ん中で、先輩の姿は消えていた。ゆらりゆらりと揺れるボートには、あたしとオールが残されている。それから他には、まんまるい月が、紺色の空に浮かんでいるだけだった。

2、海で（落花のこと） -2

声は出せなかった。先輩、と呼びかけるのが怖い。だって声がどこかから聞こえて来たらどうしたらいいのかわからなくなるじゃない。

どこもかしこも静かで、あたしは身震いする。いま目の前にいた人が、消えてしまった。しかもこんな海の真ん中で。海中しか消える場所はないけれど、飛びこむ音だって聞こえなかった。ボートだって大きく揺れたりしなかった。先輩は本当に、消えてしまったのだ。

あたしは馬鹿みたいに空を見上げたけど、そこにだってなにもない。月が浮かんでいるだけ。大声で泣きたいくらいだった。

夢でも見てるんじゃないかな、そう思ったかった。でもあたしは先輩としたキスを覚えているし、先輩と話したことも覚えている。夢なんかじゃない。いまこのボートの上であった出来事が夢なら、長尾先輩の存在そのものが夢だ。

先輩が座っていたところには、大きな水の痕がある。追いついたときの先輩は汗をかいていたけれど、あれは本当に汗だったのかな。チャペルから続いていた足跡は、先輩のものじゃなかったのかな。でもどうして、チャペルなんかで海の匂いのする水をかぶったりするんだろう。

あたしはしばらく打ちひしがれていたけど、ともかく、そのままでいるわけにはいかなかった。このままじゃ、あたしが干物になっちゃう。

あたしは震える腕で、行きにも漕いで来たボートを一生懸命漕いで、また浜まで戻った。暗くて様子がわからなかったし、ずいぶん流されていたような気がしたけれどそれでもなかった。一人だったからか、無我夢中だったからか、すぐに着く。

「君！」

浜に近づいて来たとき、あたしは防波堤のガードレールごしに叫んでいる人がいるのに気がついた。

「君！だれ？ ウチの生徒？」

薄闇の中で、あたしが着ている学校の制服だけはわかったんだろう、彼はそう言った。その人もうちの学校の紺ネクタイをしめた少年だった。身をいっぱいになりだし、興奮のあまりか裏返った声で叫んでる。

「なにしてるんだ？ 俺のボートに乗ったりして、なんのつもりだよ？」

それに始まってしばらく、非常識だのなんだのとずっと罵倒されていたのだけれど、あたしは困惑した表情のまま、なにも出来ないでいた。長尾先輩が消えてしまったことに手一杯で、他のことを考える余裕なんてなかった。

すると、その少年（といっても、すぐにわかるのだけれど、彼はあたしの先輩だった。お互いのことがわからなかったのは、あたしも彼も気が動転していたせいだと思う）は走って浜辺に降りて来る。

「おい、聞いているのか？」

「はい？ あの？」

あたしがぐずぐずしていると、彼は力任せにボートを浜に引きあげる。ボートを浜に上げるた

めには、一度海に入らなくちゃダメかなって思っていたところだったので、よかった。

別に、濡れるのが嫌だってわけじゃなくて、先輩が消えた海水に触らなくちゃいけないのが、とてつもなく嫌だったのだ。

「早く降りるんだ！」

怒鳴りつけられて、あたしはようやく、その人がだれか気がつく。長尾先輩の友達だ。確か同じ部活で、篠生さんという名前だったはずだ。

「あのこれ……篠生先輩のなんですか？」

ボートから降りると、篠生先輩は乱暴な手つきで砂浜の上を引きずっていく。あっという間にボートは砂にまみれていた。

「そうだよ。」

あれ、君、たしか高二の生徒会の子だよな……乾さん、だっけ」

「そうです」

「本当になにしてるの？ こんなところで、こんな時間に、こんなもので」

「あ……長尾先輩が……」

先輩の名前を言いながら、そういえば去年の生徒会メンバーも、周りの友達も、みんな先輩のことを「長尾」と名字で呼んでいたことを思い出す。珍しいことじゃないけど、たぶん先輩は名前で呼ばれるのがきつと嫌いなんだ。

とにかく、篠生先輩からのたくさんの質問は、長尾先輩が、の一言で返すしかなかった。なにしてたかなんて長尾先輩に聞いてほしい。ボートのことも。それに、先輩がいまどこにいるのかも。

「長尾？」

先輩の名前を出すと、やおら篠生先輩の口調はやわらかくなった。

「長尾立果に、このボートのことを聞いたの？」

「……はい。」

でも、先輩が消えてしまって」

篠生先輩から、次の返答はしばらくの間なかった。たぶん、あたしの言ってることがわからなかったのだと思う。普通は、ボートの上から消えるだなんて思わないよね。だから、あたしがボートに乗っているあいだに帰ってしまったとか、そんなふうに思うはず。

さすがにあまりにも長い沈黙に耐えがたくなってあたしが顔をあげると、篠生先輩は目を見開いて、海を見ているところだった。陽が落ちた海はもう真っ暗で、どこが水平線かもわからない。月の光が海面をきらきらとかがやかせるけど、それをきれいだといまは思えなかった。

篠生先輩は、あたしなんかを気にしている様子ではなかった。彼はそれから身震いし、こちらを見た。

「長尾から、なにか話を聞いた？」

「……ええ、少し」

篠生先輩がなんのことを言っているのか定かじゃないけど、一応頷いた。

「俺のこと、聞いた？」

「いいえ」

「話をしてもいいね？ 長尾のことを聞きたいんだ」

そう言われて、いまさらながらあたしは慌てて腕時計を見た。もう七時になる。

これから話して帰ったら、もっと遅くなると思う。家では心配はするかもしれない。遅くなるってメールを送ろうかと思ったけれど、いまはそういう気分にはなれない。

「大丈夫です」

それであたしたちは、さっきのあたしと長尾先輩のように、カバーをかけたボートの上に並んで座った。

ゆったりとした波の音が聞こえる。

空には満月が浮いている。

3、立果のこと -1

月は昔、もっともっと地球に近いところであって、その重力の影響はもっともっと強かったという。

月の力は古代の海に大きな大きな波を立て、生命の基となる元素の融合が行なわれたのだ。いまあたしたちの足元まで寄って来る波も、月に立てられた波だ。波は月の涙の波紋であるという中世の考えも、あながち嘘じゃない気がする。詩的すぎるだけで、正しいことを言ってるんじゃないかな。

— 天使様。チャペルの天使様の話も、なにかが詩的にあらわされただけなのかもしれない。

「長尾、消えたんだろ？ どういうこと？」

篠生先輩はぼそりと言った。不機嫌そうな声で、少し怖い。いままで彼は繊細なタイプかと思っていたのだけれど、どうやら神経質なタイプだったらしい。先輩が海に消えたなんて言ったら、怒られそうだった。

それでも言わなくちゃどうしようもない。信じられないと思いますけど、と前置きをして、長尾先輩が具合が悪いにもかかわらずボートで海に出て、そのまま消えてしまったことを話した。

篠生先輩はそれを聞いて、膝の上で組んだ手を動かしながらため息をついた。

「……そうか」

「あたしの勘違いかもしれないですけど、でも、そうとしか思えなくて。海の上だったし」

「今日、いつから一緒にいたの？」

「えーと……放課後、チャペルで会ったんです」

「チャペル？ 長尾が？ 君、クリスチャンなの」

「違いますけど……七不思議でチャペルのがあるじゃないですか。知ってます？」

「ああ、天使に祈ると願いがかなうって奴ね」

「それです」

もちろん、あたしが聞いていたのはそちらの話ではなく、天使様の出現する方だけれど、大した違いはないだろう。

「でもなんで長尾があんなところ行ったんだ？ そのことはなにか言ってなかったの？」

「……なんにも」

憶測でものを喋るのはためらわれたので、あたしはいろんなことは言わないでおいた。長尾先輩があたしに会いに来たと嘘をついたとか、愛と罪の告白をしたかったんじゃないかとかは。

それとも、昨日もチャペルで会ったということは話すべきだろうか？ あと、あたしが告白したこととか（チャペルで見た光も）、先輩があたしにキスをしたこととか。話そうと思えば話すことはたくさんあるけど、あたしと篠生先輩の間柄で話せそうなことはもうない。

あたしがおずおずと彼を見ると、篠生先輩はいかにも気難しそうな表情で海を眺めていた。

「あの、先輩はなにか心当たりがあるんですか？」

「うん？」

先輩が消えたことについて、うまい説明でも考えてくれているのかも、と思ったし、都合のい

い説明があるならそれに越したことはないんだけど、先輩も肩を竦めてしまった。

「別に」

きっと先輩は先輩で、なにか思うところがあるのかもしれない。

でも、消えてしまったことを笑わないのも、怒らないのも、変だ。あたしが見たことが本当だったみたいに、なにも言わない。

「別にとって感じじゃないですよ」

話をしようと言いながら、篠生先輩はなかなか自分のことは話さない。

なんでもいいから長尾先輩に関係することを聞かせてほしいのに。

そう思いながらもあたしは、どうして自分が長尾先輩のことを知りたがるのか、まるでわかっていなかった。先輩が消えてしまったからだろうか？ それとも、あたしが先輩のことを好きだからだろうか。

それ以前に、もっと根本的な疑問が残っている。あたしが本当に知りたいのはなにかということだ。あたしは先輩のことを知りたいのか、それとも先輩がなぜ消えたのかを知りたいのか。先輩があたしのことを好きなのか知りたいのか、なぜチャペルに来たのかを知りたいのか、はたまたなにを告白したかったのかを知りたいのか。

あたしは罪と愛の告白をしたと先輩は言ってくれたけれど、告白したからといってなにが変わるわけでもない。だって、あたしは疑っている。先輩の真意がどこにあるのか、そしてあのキスは一体なんの意味があったのかって。

先輩のとても冷たいキスは、なんだったんだろう。

あたしは後悔していた。先輩に告白したことを、ではなく、孝介の忠告を聞かなかったことを。孝介の忠告だってまとまりのあるものじゃなかったけど、なにか、とても大切なことをあたしは見落としている。

先輩が誠実な人じゃないかもしれないということではなく、あたしがなにかをされるかもしれないということでもなく、もっと、大事なことを。

どうして先輩はあのときチャペルに来たの？ どうして昨日あたしにキスをしようとしたの？ 今日なぜチャペルに来たの？ どうして海に来たの？ どうしてあんな話をしたの？ どうしてあたしにキスをしたの？

唇に、残ってる。……先輩。

「長尾が消える前、君たちはなにをしてた？」

あたしはいきなり核心をつかれ、どぎまぎしながらなにを言おうか考えた。ともかくキスをされたということは言いたくない。

「ボートの上で、話をしました」

「なんの話？」

「先輩のことです。……あたしから内容は言えません」

「そっか。」

俺のときは、あいつ、俺を追いかけて海に入ったんだよ」

篠生先輩が言う「俺のとき」というのが、なんのことやらわからない。あたしが首をかしげ

ると、篠生先輩は少しだけ笑った。

「おかしいだろ。でも、本当なんだよ。冬に、ここで、あいつは消えたんだ」

篠生先輩は意を決したようにしゃべりだした。

先輩があたしの話になにも言わなかったのは、それが彼の目の前で一度あったことだからだった。それはあたしが知らない、先輩の話。

話の腰を折ったりせず、静かに聞いていることにした。篠生先輩の視線を追いかければ、静かな夜の海がどこまでも広がっている。

3、立果のこと -2

知ってるかもしれないけど、繰巢に人魚が出るっていう伝説があるんだ。このボートはそういう話を聞いて、俺と長尾とで持って来た奴なんだよ。一年前くらいからここに通いつめて、人魚を探してみた。冗談みたいなものだけどね、そのうちに飽きて、ボートは放置したままになった。人魚は見つからなかったよ、もちろん。

でも、海を見ているっていうのはすごく落ち着くんだ。浜風に吹かれながら、揺れている海を見るのは。この浜辺って、ちょうど目の前に月が浮かんで来るんだよ。季節によってずれはあるけど、ここで見る月はとても大きくて綺麗なんだ。それなのに落ち着くなんていうのは変かもしれないけど。知ってる？ 満月のときに気分が嵩揚するのは、月の引力で血液が頭にのぼるからなんだ。狼男が月で変身するのは、つまり、興奮状態になるからってわけ。

ここに人魚が出るって知ったのは、学校でなんだ。

校長室の前にかかっている人魚の絵があるだろう。あれって小川未明の童話かと思ってたんだけど、違うって話を聞いて。それで、図書館で調べてみたら、繰巢に人魚の伝説が残ってたんだよ。不思議な伝説が残ってる場所が近くにあるって言われたら、気になって。それで通うようになったわけ。

その伝説っていうのはね、こういう話だよ。

昔々、繰巢の浜に小さな女の子が箱に入れられて打ち流されてきた。ある漁師の夫婦が彼女を拾いあげ、娘として育てたんだ。大きくなり美しくなった娘は毎日海を見つめて貝を拾い、海の中に入って藻を掬い、養父母を支えて暮らしていた。そんな彼女をこのあたりの庄屋の息子が見初めて結婚話が決まった。

ところが結婚まであとわずかというある日、今度は一人の男が浜に打ちあげられた。何日かの嵐の後だった。村の皆はそれほど遠くない同じような村の若者で、嵐のせいでここまで流されて来たのだと思っていた。その男もそのようなことを言ったしね。彼を一番はじめに見つけたのは例の娘だった。そして彼女は若者を見た瞬間に恋に落ち、若者のほうも目を覚まして彼女を見るや否や、運命的な恋を悟ったんだ。

二人は娘の祝言を前に、逃げ出すことに決めた。二人は何気ない風を装って浜に出かけたけれど、そこまでだった。娘の養父母は事の次第に気づいていて、密かに村人たちを集めていたんだ。もちろん、自分の娘を失いたくない一心でね。

娘を連れて海に逃げようとする男は船なんか用意していなかった。彼は村人たちに捕まり――ここは相当浅瀬だからね、――調べてみると、彼の体にはびっしり鱗が生えていたんだ。打ちあげられた時には一枚もなかったのに。村人たちは男を、娘の前でなぶり殺しにした。なぜなら異界の、忌むべきものだったからだ。一刻も生かしておくわけにはいかなかった。娘はそれを目の当たりにしながら、こう叫んだ。「生まれ変わって添い遂げましょう」。そして彼女はその場で息絶えた。亡骸を調べたら、彼女にも鱗があった。気味悪がって、村人たちは二人の死体を海に投げ捨てたっていうよ。

それから、浜に出る村人は時々人魚を見かけるようになった。とても美しい人魚で、月の登る

たそがれどきに浜に現れては、漁から帰る男たちを誘惑するんだって。彼女は恋人だった人魚を探す、例の娘だと言われてる。少しずつ生気を吸い取って、三日目の夜には殺してしまうそうだよ。でも彼女に愛されて彼女の血肉をもらえれば、永遠の命をもらえるんだ。

もちろん、彼女の恋人を殺した村人たちを、人魚が気に入るわけではないんだけど。やがて村人たちは気味悪がって村を離れていった。それで、繰巢は、いまではなにもないそうだよ。

ごめん、ずいぶん話がそれたね。ただ、少し心構えが必要なんだよ、この話をするのはさ。でも……人魚の話を知らなくて、俺たちがここに来ていなかったら、あんなことは起きなかったと思うんだ。だから、人魚の話は、俺にとってとても大切だ。君には、ぴんと来ないかもしれないけど。

君は、長尾のことが好きなんだよな。

そういう君に、本当はこんな話はしたくないよ。馬鹿げてるし、それに、悪いのは俺なんだから。あれが夢だったらいいと思ってるけど、それは俺の逃げだと思う。でも長尾は生きてる――ああごめん、ちゃんと話をするよ。

――それでね、俺には彼女がいたんだ。今年の冬に病気で死んでしまったけどね。うん、本当に。あまりにも唐突だった。ずっと俺に隠してたんだけど、彼女は白血病だったんだって。クリスマスに会えなくて、風邪だとしか言われてなかったんだ。正月に高熱が出て、二日後にはもう死んでしまった。

すごく悲しくて……あとを追おうと考えたんだ。

高校生って、結構忙しいものじゃないか。通夜と告別式が終わったら、もう三学期が始まった。それがすごく嫌だった。進路調査とかもいっぱいやるようになるじゃないか。そういう現実がすごく嫌になったんだ。みんなは落ちこんでるけどでも仕方なかったねって前をむいてるし、それで、進路票を見ながら琴子のことを考えてたら、気がついたんだ。琴子は……彼女は、将来やりたいこととかそういうことをなにも言わなかった。俺は建築をやりたいかったんだ。彼女にたくさんその話をしたけど、琴子はなにも言わなかったんだ。

もしかしてとっくに諦めてたのかなって思って、そんなことにいまさら気がついたことにも嫌気がさした。本当のところ、どうだったのかはわからない。もしかしたらなにか夢があったのかもしれないけど、彼女が諦めてたにせよ、なにか考えていたにせよ、どっちにしても俺は知らなかったんだよ。

自分のことしか考えてなかった。

なにもやる気がしなくなった。というよりも、やりたいことがなくなった。受験勉強もしたくなかった。それどころか、食べるのも、空気を吸うのも嫌だった。腹が減っても我慢できるけど、息をするのってそうはいかないんだぜ。琴子のことを考えてると、気がついたら息を吸いこんだり、出したりしてるんだよ。

しばらくのあいだ、俺はずっとどうやって死ねばいいのか考えてた。

長尾は必死で俺を慰めてくれようとした。あんまりよく憶えてないけど、あいつは、琴子は俺を待ってるから、焦るなって言ったんだ。彼女のやるべきことはおまえを待つことで、俺のやることはそれとは違うけど、それはちゃんとあるはずだって言ったんだ。でも、そのときの俺には

わからなかった。琴子が待ってるなら、早く死のうと思ったし。おまえにはわからない、なんて言って、あいつにあたり散らして、学校からそのままここに来たんだ。

身投げっていうのかな、海に入って死のうと思ったんだ。

ボートを漕ぎだして、ずっと深いところで溺れようと思った。俺はそれでよかったんだ。琴子に会いたっていうより、なにもないところに行きたかったんだと思う。死後の世界がどうなってるのか知らないけど、天国も地獄もなければいいって思った。苦しいことも悲しいことも、全部ないところに行きたかった。魂があるなら、俺は魂もいらぬ。どこかで琴子は待っているのかもしれないけど、でも、俺は自殺するんだし、到底同じところにいけるはずはなかったしね。

長尾は、なんで俺のためなんかにあんな馬鹿なことをしたんだろう。それはいまでもわからない。俺なんてどうでもいいんだぜ。この世に生きる意味なんて、ないんだ。

なのにあいつ、浜まで追いついて俺がボートに乗ってるのを見ると、多分、死のうとしてるのがわかったんじゃないかな、冬の海に飛びこんで追いかけて来たんだ。俺は来るなって叫んだんだ。でも長尾は諦めなかった。俺の名前を呼びながら、こっちに泳いで来るんだ。でも、そのときには俺はもうずいぶん進んで、たぶん深いところにまで来ていたんだと思う。急に長尾の姿が見えなくなった。きっと心臓マヒなんだと思った。

長尾が死んでしまうなんて、そんなつもり、ぜんぜんなかったんだ……ただ、自分がいらなかっただけなんだ。

潜って救けなくちゃと思ったけど、多分すごく混乱していて、俺はしばらくなにも出来なかった。朦朧としていたから、どれくらいかかったのかわからないけど、とにかく瞬時に俺は飛びこむべきだったんだ。死んでも構わなかったんだから。

遅れて俺も飛びこんだけど、あいつの姿は見当らなかったんだ。どこにも。日は沈んでも満月で水中は割と明るかったんだけどね。

線巣には滅多に人はこないし、俺は急いでいろんなところに連絡して助けを呼んだよ。なのに、あいつは死体も見つからなかった。みんな死んだと思った。でも、三日後に長尾はびしょぬれで家に戻って来たんだ。

俺を見て、生きててよかったって言ったよ。確かに、長尾のおかげで生きのびたんだと思う。

三日の間どこにいてなにをしたのか、みんなが聞いた。そうしたらあいつが言うには、人魚に救けてもらったって、そう言うんだ。悪い冗談だと思った。でも、詳しいことはなにも言わなかったんだ。

それから、あいつの様子はおかしい。昔の長尾はああじゃなかった。

3、立果のこと -3

篠生先輩の話は終わったみたいだった。それきりなにも言わなくなって、あたしにもなにも言えなかった。

篠生先輩の言う「ああ」って、なんだろう。長尾先輩のどういうところを指してるんだろう。孝介が言ったことと同じなんだろうか。あたしが知らない先輩のこと？ 前の先輩はどんな人だったのかな。いまの先輩はどんな人だっていうのかな。

「本当に先輩、消えちゃったんですか」

「……俺の言ってることの意味、わかるだろ」

「でも、今日の先輩は、ポートの上から消えたんですよ！ 全然、全然違うじゃないですか」

「そうだね」

篠生先輩が言っていることが本当だったら、もうそれから半年くらい経ってる。あたしはそのあいの先輩のことを思い出そうとした。生徒会の引き継ぎは一月で終わってたから、生徒会室で会う機会だってそんなにあったわけじゃない。でも、神村先輩と一緒に遊びに来てくれた。卒業親睦会とか、入学歓迎会とか、忙しいイベントも多かったから、手伝いもしてくれた。あたしはおかしいなんて少しも思わなかった。

あたしが先輩が変わって気がついたのは、昨日がはじめてだ。

本当に先輩はおかしいんだろうか。篠生先輩の思いこみじゃない？ それとも、あたしは長尾先輩のことなんてちっともわかってないんだろうか？ あたしは、先輩のことが好きなのに。

「状況は違うけど、あのときのことと、今日のごとは、関係ないわけじゃないと思う」

「もう先輩は帰って来ない？」

「そんなのはわからないよ」

頭の中がぐちゃぐちゃだ。それで先輩はどうしてあたしにキスしたんだろう。自分の気持ちとか、先輩の気持ちとか、それだけでもややこしいのに、篠生先輩の話を聞いたらそんなことがどうでもいいような気がしてしまった。

うん違う、どうでもよくなんかない。大事なのに、よく考えられない。

「これだって俺の妄想かもしれない」

「でも、先輩は本当に消えたんです」

「泳いでるだけかもしれないじゃないか」

少しも信じてない口調で、篠生先輩はそう言った。

あたしなんか、なにが出来るんだろう。先輩は明日もチャペルに来てくれるだろうか。先輩の気持ちは本当ですか、なんて聞いていいんだろうか。それともそんなこと、確かめたってしょうがないことなんだろうか。

篠生先輩は立ちあがる。

「俺、あれからまともに長尾と話が出来なくて。だって聞けないだろ、俺の代わりに、おまえが死んだのかよ、なんて」

きっと、篠生先輩はずっとだれかにこの話をしたかったんだと思う。これは彼の愛と罪の告

白だ。罪がない人間なんていないって、長尾先輩が言ってたのを思い出す。先輩はお姉さんの話をした。

告白って真摯なものだけど、それだけじゃない。楽になりたいからするんだ。

あたしも、そうだったのかもしれない。チャペルで二人きりになれたからチャンスだなんて思ったけど、ただ胸の苦しさで、先輩に対する疑いとを口にして楽になりたいだけだったのかもしれない。

罪と愛の告白。それはとても似ているものだと思った。どちらも重苦しくて、一人では耐え切れない。だれかとわかちあいたい。その相手はだれでもいいわけじゃないけど、だから、告げる相手は特別だと思うけれど。

篠生先輩にとってあたしは、信じられない現実をわかちあってる相手。あたしは長尾先輩のことが好きだから彼のことは特別で、長尾先輩は、……どうなんだろう。

「長い話をして悪い。もう帰ったほうがいいよ」

先輩は駅まで送ってくれて、別れ際に「なにかあったら教えて」と言う。

でもたぶん、あたしはこの人にはなにも言わない気がする。彼にとっては、先輩がどうなったかという事実が大事なんだと思う。あたしにとってはそうじゃない。先輩の気持ちとか、自分の気持ちとかが大事だ。キスをしたことさえ言えなかったんだから、もう話すことはないんじゃないかな。

これからどうなるかなんてわからないけど、あたしはそう思いながら、篠生先輩と別れた。

3、立果のこと -4

帰る途中で携帯を見ると、お母さんと孝介からのメールや着信がいくつも入っている。携帯はカバンに入れてたから、ぜんぜん気がつかなかった。さすがに八時を過ぎてるし、生徒会の仕事で遅くなるときは朝から話をしておくから、心配したんだと思う。

家にこれから帰るというメールを送ってから、孝介のメールを見た。親に言われてあたしのことを探してくれたみたい。メールの一つには「昨日からなんかあったの、長尾先輩と」って書いてあった。孝介なりに心配してくれたんだろうけど、お兄さん気取りでむかつく。

今日、ただ先輩とキスしただけだったら、孝介にはなにも言わなかったと思う。でも、ぜんぶがぜんぶ、すごく重たかった。あたしの気持ちはどうなっちゃうんだろう。先輩の気持ちは本当なんだろうか。また明日、先輩に会えるのかな。そう思うと、泣きそうになった。

家に戻ると怒られることもなかったけど、心配かけてごめんね、と親には謝って、食事もしないで部屋にこもった。おなかはずいている気がしたけど、そんな気分になれない。孝介に電話をすると、すぐに出てくれた。

「ごめん、帰った。探してくれた？」

「おばさん心配してたぜ。どこにいたんだよ。俺、学校まで見に行ったんだぞ。どうせ、長尾先輩となんかしてるんだろうと思ったけどさ……おばさんに言うわけにもいかないし」

「うん、ごめん」

「で、なんかあったの」

あたしが浮かれてれば、聞いたりしなかったと思うけど、声だけであたしが沈んでいることはわかったらしい。

孝介らしい言い方で、大して気もなさそうに言われて、その声を聞いたら我慢していたものが溢れてしまった。こんな言い方をするけど、本当はすごく心配してくれているのはわかってる。布団をかぶって泣き出すと、孝介はさらに呆れたような声で「おいおい」と言った。

「まさかほんとに、やられちゃったとか」

「そんなんじゃない、わよ、孝介の馬鹿、バーカ！」

「いいけど八つ当たりするなよ。で、なにがあったの」

あたしは泣いていたし、聞き取りずらかったと思う。それに話していることだっておかしなことばかりだ。チャペルの光や、海の匂いがする足跡、ボートから消えてしまった先輩。先輩が消えたってところを見た篠生先輩の話。あたしだって、自分が見たものなのによく信じられない。話で聞いただけじゃ、頭がおかしくなったって思われるのがオチだ。

孝介もやっぱりそうだった。

「いくらなんでも、それはないだろ」

あたしだって信じたくない。でもあたしは知ってる。先輩の唇が、どれだけ冷たかったか。

「本当に消えたんだよ、ボートの上から」

「でも、その瞬間は見てないんだろ。海に飛びこんだんじゃないのか」

「なんでそんなことするのよ、しかもそのあと、見えなくなっちゃったのに」

「だからそれは自さ……ごめん」

「篠生先輩のときだって、追いかけて来たのに見えなくなっちゃったって、」

「それこそ、溺れたか引き返したかだろ。人は消えないよ」

じゃあどうして、先輩はあたしの前からいなくなっちゃたんだろう。あたしにキスをしたのに。あんなに冷たい唇で。あたしは声を上げて泣いた。先輩にもう一度好きだって言えるかな、好きだって言ってもらえるのかな。もう会えないかもしれないけど。本当に思ってもらえてないかもしれないけど。

「おまえ、どうしたんだよ」

「どうもしてない！」

「そんなこと、あるわけないだろ。おまえしか先輩のこと見てないならともかく、俺だって見るんだから」

「ねえ、あたし今日先輩に告白したの」

「……振られたショックでそんなこと言ってるの」

「先輩も好きって言ってくれたもん」

「じゃあなんで……」

なんで、なんてことはあたしが聞きたい。あたしは盛大にすすりあげながら、泣いてしゃべって、孝介を罵倒した。

「先輩、あたしのこと好きってほんとかな」

「本人に聞くしかないだろ」

「でももう帰って来ないかもしれないじゃない」

「そんなわけ、ないだろ」

孝介の声は、少しだけ優しくなった。

「消えるはずないよ」

そうだ、人が消えるはずはない。先輩がボートから消えてしまったのは、キスをしてあたしの前に居辛くなって、海に飛びこんでしまっただけなんだろう。ボートが揺れたり、水音が聞こえなかったのは、あたしが動転してたから。篠生先輩のときだってそうかもしれない。本当は、もう諦めて浜に引き返してただけで、何日か戻らなかったのは大切な友達すら護れない無力感に押し潰されて、家に帰りたくなっただけなのかもしれない。

だから、気に病むことなんてなにも無いのだ。

だから、あのキスにもなんの意味もこもってはないのだ。

あたしは先輩のことが好きで、そしてきっと先輩もあたしのことを好きでいてくれるというだけなのだ。

そうってみても、涙は止まらなかった。

あたしの目の前に起こったことを否定しようとするほど、悲しくなる。だって、どんなに誤魔化してもあたしにはわかっていた。篠生先輩にわかってたみたいに。

先輩は死んでるんだ。

じゃああたしが会った先輩、あたしにキスをした先輩が一体なんなのかというのは、わから

ない。でも先輩は生きていない。だって、先輩の唇はあんなに冷たかったのだから。

「なあ、しばらく長尾先輩には会わないほうがいいんじゃないのか」

「……でも、」

「落ち着けよ」

「会いに行くよ、先輩に会わなきゃ。だって、もう会えないかもしれないのに」

無茶苦茶なことを言ってるのはわかってる。でも、いまがあまりにも無茶苦茶なんだから仕方がないじゃない。

孝介はため息を吐いた。

「先輩に無理矢理やられちゃったって話のほうが何倍もましだよ」

「先輩はそんなことしない」

じゃああのキスはなんだったんだろう。

それからふと、思い出した。先輩が言っていたこと。意味がわからなくて、そのあとのことがあまりにも複雑で、忘れかけてた。――「天使は、悪魔に魂を売りたいという願いをかなえらると思う？」

先輩はチャペルに、その願いを叶えてもらいに行ったんだろうか。あたしがいたから、果たせなかったけど。

それって、どういう意味なんだろう。

4、告白（伝道） -1

次の日、朝から先輩の教室に行ったけれど休みだった。先輩の携帯は知らないし、どうやって先輩に会いに行けばいいのかもわからない。

仕方なく、放課後はまたチャペルに行った。学校を休んでいるのだから来るわけがないと思うのだけれど、昨日もおとといもここで会ったから、つい足を運んでしまった。それに、白い光のこともあったし。

チャペルに行くと、もう孝介が先に来ていた。あたしも、教室からすぐに出て来たと思ったんだけど。孝介のクラスのほうが、先にホームルームが終わってたみたい。

まだ神父様もお帰りになっておらず、掃除当番が箒を持っている。孝介は一番後ろの席に腰かけて、スタンドグラスの天使様を見ていた。あたしは、首筋がチリチリとするのを手で押さえながら、孝介の隣に立つ。

「孝介」

「外で話そう。さすがに、まだ人いるし」

うなずいて、あたしと孝介はチャペルを出て、裏手の木立の方へと歩いていった。孝介は呆れているみたい。仕方ないと思うし、あたしも話を聞かされるだけだったら、同じように感じると思う。

孝介はため息をついて、こう言った。

「さっき確かめておいたけど、長尾先輩は今日お休みだっけさ」

「うん、あたしも聞きに行った」

「で？ 夢見がちな乙女としては、先輩は海に沈んでるって言うのか？」

「……孝介にそう言われると、あたしすごい馬鹿みたい」

「悪かったな。自分がおかしいこと言ってるのはわかってるんだろ」

わかってるけど、でもあたしにとっては真実だ。こうして人に話していると現実味がないけれど、でも本当のことだ。

「そんなこと言って、来てくれたくせに」

「泣かれたら仕方ないだろ」

「お兄ちゃんでもなくせに」

「あのね、俺は長尾先輩が気の毒だと思ってんの。おまえみたいなのに好かれた挙句、死んでるとか言われて、かわいそうだろ」

ひどい言い方だけど、本気じゃないのはわかる。それに、孝介の考え方は、すごくまともだと思う。わかってるんだけど。

「それで、昨日のおかしなことっていうのはまず光だっけ？」

チャペルの裏側に回ったところで孝介は足を止めた。わざわざチャペルを出たのは、そんなことを確認したかったからみたい。

「うん。目を開けていられないくらい、まぶしかった」

「西陽がさしこんで、ちょうどスタンドグラスが光ったとか」

「そんなじゃなかったよ。チャペル全体が光ったみたいに眩しかったの。先輩は、天使様じゃないか、なんて言ってたけど」

孝介は、あたしが言ったことを全部確かめて回る気だろうか。でも、光のことだって、昨日すぐに見て回ってもなにもわからなかった。

「天使様って、おまえが前に言ってたよな。なんだっけ、祈ってたら天使様が現れて、伝道を授けてくれたっていう話だっけ？」

「でも、おととい先輩から別の話を聞いたの。天使様に愛と罪の告白をすると、天使様が願いを叶えてくれるっていうやつ」

「ふうん、ちょっと違うんだな。おまえはさっきの話、だれに聞いたんだ？」

「太秦先生。うちの卒業生でしょ」

「そういえばそうだっけ」

そう言いながら、孝介はあたりの木の上を見上げたりしている。光源を探しているみたい。あたりまえだけど、天使様の光っていう説も信じられないよね。

「あのさ、俺も色々考えたんだけど。今回の場合、頭がおかしいのは長尾先輩か、おまえと篠生先輩かどっちかになるだろ」

「……うん」

「三年は十二月が過ぎたらもう学校も来なくなるんだし、あと三ヶ月のことなんだから忘れて過ごした方がいいと思うんだけど」

「それは出来ない」

「だよな」

肩をすくめて今度はチャペルの入り口のほうに歩いていく。あたしはあまりよく考えがまとまらなくて、孝介の後をついて行くだけだ。

長尾先輩に会えたとして、自分がなにを話そうとしているのかも、本当はわかってない。

言いたいことなんていっぱいあるけど、どれも的外れになりそうだ。先輩が本当のことを言ってくれるかもわからないし。……それは先輩を信じてないからじゃなくて、もしも先輩の立場だったら、きっといろいろなことを隠したいんじゃないかと思うからで……

表に戻ると、ちょうど帰って行く神父様の後ろ姿が見えた。チャペルの中にはもう、だれも残っていなかった。

スタンドグラスの天使様は、昨日ともおとといとも同じ笑みをたたえて、きらきら輝いている。昨日、あたしの声を聞いてくれたのはこのひらべったい天使様なのかな。先輩が会いに来たのはこの天使様なのかな？

孝介は相変わらず、なにか探し物があるようにしている。

変なトリックがあったらそれこそ嬉しいけど。光も足跡も、先輩が消えてしまったことも、全部、答えがあればあたしだって嬉しいけど。

孝介を視線で追いながら、あたしは夕暮れのチャペルでぼんやりと立っていた。

ここに先輩が来なかったら、あとは海に行くしかない。それとも、しばらく会えないものだろうか。篠生先輩のときは、三日帰らなかつたって言っていたし。もしかしたら、二度と会えない

かもしれないけど。

そんなことを考えているとき、背後で扉の開く音がした。まさかと思って振り返ると、長尾先輩が立っている。先輩はあたしを見ると、とても悲しそうな顔で笑った。

「今日も来てたんだ？」

本当に、昨日のことが夢だったらよかったのに。告白したこととか、キスのことだって夢にしてもいい。だって、昨日のことが夢で、篠生先輩の話が作り話なら、そんなことはこれからいくらでも出来るもの。

「今日は高宮が一緒なんだな」

「ええと、あの……先輩を探してて」

孝介を振り返ると、ぽかんとした顔であたしと先輩を交互に見ている。

「おい、乙女」

なにを言い出すのかわからなかったの、あたしはだれのためかわからないけれど必死に言いつくろった。

「ほら昨日、先輩が先に帰っちゃったから、あたしが落ちこんで孝介に相談して、それで今日は心配してくれて来てくれて……」

「うん、昨日はごめん」

先輩があっさりとして謝るから、涙が出そうになった。先に帰っちゃった、なんて言ったら、自分でもそうだったんじゃないかと思いたくなる。慌てて頭を上げて、孝介に言った。

「ありがとう孝介、あたし先輩と話があるから」

「……外にいるからな」

「うん。……」

孝介を追い出してしまうと、チャペルの中は急に静かになった。心臓が抑えておかないと飛び出してしまうそうなくらい高鳴っている。

それで、なにから話そう。少しだけ考えて、あたしはステンドグラスの天使様を見上げる。天使様の七不思議を聞いたときに思い描いた天使様の姿とは違うけれど、あたしには他に祈るものがなかったから、せめてと思って。

「先輩、昨日、あの後、あたし、……篠生先輩に会いました」

「そっか。じゃあもしかして、俺の話聞いた？」

頷くと、先輩は目を閉じた。

「ねえわかるかな、昨日の光はすごくしんどかったけど、それだけじゃなくて、ここにいるだけでも本当は結構キツイ。不思議だよな。別に俺はクリスチャンじゃないし、〈彼女〉もキリスト教の悪魔みたいなのは違うと思うんだけど。でもそれがあるから、チャペルに来ると、俺も思いつくんだ。俺はもう生きてないって」

わかってたけど、先輩の口から聞くと身体から力を抜けていく。

先輩はいまあたしの目の前にいて話をしているから、そんなはずないのに。

でも、本当のことだった。

「乙女、俺が怖くない？」

そう言いながら、先輩は少しずつあたしに近づいて来る。いまさら、孝介が言っていたような意味で先輩を警戒しようとは思わなかった。

先輩が言っているのは、きっと少し違う意味だけど。

「今日が三日目だ。俺がもう一度キスをしたら、乙女も俺と同じになっちゃうんだけどな」

「……え、」

「君が俺を好きだって言ってくれたから」

そう言われても、あたしは逃げようとは思わなかった。先輩の言葉も態度も穏やかで、怖くなんてなかった。彼が手を伸ばしてあたしの手に触れても、冷たいと思っただけだった。

「ねえ先輩。先輩、どうしてチャペルに来たんですか」

「乙女に会いに来たんだよ」

「そうじゃなくて、おととい。あのとき、あたしがいたのに驚いてましたよね。先輩、天使様に会いに来たんじゃないですか」

「愛と罪の告白、か。

そうだな、たぶん、そうだったと思う。俺がこうなってから、もうずいぶん経ってて……もうそろそろ、このままじゃいられないってわかってて、だから来たんだ。俺は死人だから、この先に人生なんてない。どこかでいまの生活はあきらめなくちゃいけなかった。

そのことは仕方ない。あのとき終わるはずだった俺の人生を、彼女が引き伸ばしてくれたんだからね。

だから、そろそろ彼女の願いを叶えてもいいかなって思ったんだ」

「彼女？」

「人魚だよ。繰巢の浜に人魚が出るっていう話、知ってる？」

「篠生先輩から聞きました」

「あの日、溺れた俺を助けてくれたのは人魚だった。あんなに探していた頃には見つからなかったのにな。

彼女はとても、きれいなんだよ。暗い海の中で、満月と彼女だけが輝いてた」

昨日見た夜の海と真っ白な月を思い出す。溺れたときの先輩の姿なんて見てないけど、あたしは想像していた。青白い肌の人魚と、苦しそうにもがく先輩。大きな月からの光が、二人を照らしていたんだろうか。

そんなつもりはなかったのに、気がついたらあたしはぼろぼろと涙をこぼしていた。

悲しいのか悔しいのか辛いかわからない。でも、涙が止まらない。

「俺は多分、彼女がずっと待ってた人間なんだよ。俺が溺れたのだって篠生のせいじゃない。きっと逆で、俺が溺れるために篠生はあんなことをしなくちゃいけなかったんだよ。あいつのせいじゃない。俺は死んだっていいって思ったから、海に飛びこんだ。篠生が気にすることなんてないんだ」

先輩は優しい。篠生先輩にも、人魚にも、……あたしにも。篠生先輩が苦しまないように、あたしが傷つかないように、そう言ってくれる。

「天使なら、俺の願いを叶えてくれるかなって、そう思って。彼女の苦しみも俺の苦しみもきれ

いにしてくれるんじゃないかと思って。天使が俺たちみたいな存在の願いを聞き届けてくれるなんて限らないのにな。……でも、乙女がいた」

「あたし、邪魔しちゃった、んですか」

「そうだったらよかったけどね。巡り合わせが悪かったよね。俺が欲を出したから。……ごめん。当たり前だけど、あんなことはしちゃ駄目だった。俺は死んでるのに」

「先輩はここにいるじゃないですか！」

「それでも、俺は息をしてないし、なにも食べないし、心臓だって動いてないんだよ」

先輩はずっと静かに話している。どうしてこんなふうに話せるんだろう。聞いているあたしが泣いているのに。もっとも、あたしは結局自分のために泣いているんだけど。だって先輩は助けてくれた人魚のためにチャペルにいるのであって、あたしのためにここにいない。それが切ない。

「半年だけど、命を引き延ばしてもらったことに俺は感謝してるんだ。ずっと、俺は死んだ姉さんの代わりなんだと思って生きて来たから、親のことはけっこう恨んでたんだけど、そのまま死んでしまわなくてよかった。それに、ごめん乙女、君からしたらとても残酷なことだけど、半年前に死んでいたら、俺は君にキスすることも出来なかった」

あたしがおとぎ話の物語の中に生きてたらいいのに。そうしたら、あたしの涙で王子様は元の姿に戻れる。でも、あたしの涙がいくら先輩の掌に落ちて、その手にぬくもりは戻らなかった。

「君を好きだったよ。君の気持ちに気がついてから、ずっと」

そんなことを言って、先輩は笑う。あたしの手を強く握るだけで、先輩はあたしに近寄ろうとはしなかった。もうキスは出来ないって、先輩は言ってたな。あたしが、先輩と同じものになってしまうから。

「ありがとう」

不意に白い光が、ふわりと茜色のチャペルに舞った。昨日みたいに、射るような強い光じゃない。どこからともなくふわふわと舞い落ちて来た光は、この世のものとは思えなかった。幻みただけけれど、それは確かに天使の姿をしている。ステンドグラスの天使様なのかどうかはわからないけれど、白い光には双つの翼が生えていて、はばたいている。あたしたちにむかいあうように出現したていた。

先輩の手が震える。あたしは思わず、叫んでいた。

「やめて！」

天使様がなにをしに現れたのかはわからないけれど、もしかしたら先輩の告白を聞いたのかもしれないなくて、そうしたら天使様は先輩の願いを叶えてしまう。

先輩がいなくなる。

まだあたしは先輩と話し足りてない。まだ連れて行かないでほしい。そんなことばかり考えていて、無我夢中だった。

あたしが大きな声を出したせいだと思うけど、チャペルの扉が開いて、孝介が飛びこんで来た。

孝介は入って来たなりに、ありえない白い光に目を見開く。なにが起きているのか、わかっているのかどうか。あたしも先輩もなにも言えない間に、孝介は光にとりまかれてしまった。

天使様は光から人間の形へと変わる。

どうなっているの。

それから、声が聞こえた。孝介の声だったけど、孝介の声じゃない。

——天使様だ。

「悟れ、人の子よ」

そう言うと天使様は大きく開いたドアから見える、月を指差した。まだ暗くなる前の空にはもう、少し欠けた月が昇っていたらしい。

いつの間にか天使様の両手には弓矢が握られていて、きりきりとふりしぼられている。光の天使様の姿なのに、弓をつがえる姿勢は、あたしが見慣れている孝介のものだった。

あの矢はきっと当たる。孝介の射をいつも見ているから、あたしにはそれがわかった。

風を切る音を立てて矢が飛んでゆく。その矢はやがて月に命中し、音を立てて月が割れた。それと同時に、高い悲鳴が頭の中に響き渡る。

ああ、これはきっと人魚の声だ。

だって、とてもとて、悲しい音色をしていたから。

有り得ない光景を見ながら、あたしは篠生先輩から聞いた、悲しい人魚の話を思い出していた

。

4、告白（伝道） -2

我に返ると白い光は消えていて、孝介が気を失って倒れるところだった。先輩を見ると、昨日にも増してつらそうだ。あたしの手を握る先輩の手も濡れているけれど、それは涙で濡れたせいではなく、先輩からは昨日と同じように磯の香りがしていた。

「……行かなくちゃ」

先輩は、ゆっくりとあたしの手を放してそう言う。

「行かないで先輩」

「行かなくちゃ、ごめん」

重たい足取りで、先輩は歩き始める。追いかけてやめようとする、先輩が叫んだ。

「頼むから来ないでくれ！」

そう言われたら、もう進めない。

先輩がチャペルを出て行ったあと、あたしは孝介の傍に行って肩を揺すった。顔をしかめながら彼は目を覚まして、あたしの泣きはらしたひどい顔を見上げる。頭を振って起きあがるから、大丈夫、と聞いてみた。

「なんだ、いまの」

「天使様……」

「俺、月に当てたよな」

「そう、見えたけど」

自分の手を確認しながら、孝介はあたしを見るけど、あたしにも説明は出来ない。でも、あたしが言っていたもろもろのことはようやく信じる気になったかもしれなかった。

先輩のことも。

孝介に怪我とか、おかしいところがないならそれでよかった。

あたしはすぐに立ちあがる。来ないでほしいと言われたけど、まさか先輩をそのままには出来なかった。

孝介は止めてたみたいだけど、あたしは気にせずにチャペルを出て歩き始めた。危険なことなんてない。もう天使様は、あたしたちに伝道を与えてくださったんだから。

昨日みたいに、濡れた足跡は海へと続いている。潮風が先輩の行った方向を教えてくれる。あたしは先輩を追いかけて、海を目指した。

5、海で（高い木の梢から落ちた花）

先輩は言っていた。もしもあのとき人魚に助けられていなかったら、あたしとキスをする事はなかったんだって。本当は半年も前に、冷たい海で溺れて死んでいたから。だから、もし先輩がそのときに死んだままだったら、あたしは先輩に告白するチャンスもなくて、こんなに苦しい気持ちを知らなかった。

夢みたいだけど、先輩とあたしのあいだにあったことは、本当にあったことだ。

たとえ、そのとき本当は先輩が生きていなかったのだとしても。

あたしと先輩は、本当にキスをした。

学校は高台にあって、緑楽に出るにはずっと坂を下ってゆく。あたしは急いだりしなかった。先輩はもうどこかに行ってしまうようなことはないし、逆にどんなに急いだって、先輩をひきとめることは出来ない。

天使様は先輩の祈りに応えたから。

夕陽の中を歩きながら、一步進むごとに、ひとつひとつ、先輩のことを思い出した。でも先輩と出会ってから一年半にもなるのに、この三日間のことばかりしか浮かばない。だっていままで先輩と手を繋いだことなんてなかったから、生きていた頃の先輩の暖かさがどんなものかなんてあたしは知らない。あたしが知ってる先輩のすべてはとても冷たい。それはあたしたちがありえない恋をしたからだ。

先輩に近づかれてドキドキしたのも、存在しなかったはずの気持ちだなんて、ひどすぎる。

篠生先輩は、長尾先輩は変わったようなことを言ったし、あたしがもともと好きになったのは生きていた頃の先輩だけど、でも、あたしの心に刻まれているのは変わってしまったあとの先輩なのだ。

あたしが好きになった人は、本当は存在しない。

いつの間にかまた泣いてたけど、気にしていられなかった。

ずっとこのまま、歩いていければいいのに。いまはまだ、あたしの中で先輩は本当には死んでない。あの先輩は生きてないなんて言ってたけど、でも、あたしの前にいて、あたしと会話をして、そしてキスが出来た。

海に辿りついたとき、きっともう先輩は動かなくなってる。

そんなの見たくない。

来るなと言われても追いかけているのに、こんなことを思うのは勝手だけれど。

波の音が聞こえて来る。

潮の香りがする。

海が近付いて来る。

精一杯ゆっくりと歩いて来たから、緑楽に辿りついたときにはあたりはずいぶん暗くなっていた。夜が来る前のきれいな紺色の空には、さっき天使様が射抜いた月が昇っていて、浜辺を照らしている。

浜辺にはボートにかけてあったカバーが投げ捨てられていて、静かな波間に、先輩たちのボー

トが揺れているのが見えた。一見、だれかが乗っているようには見えないけれど、ボートの中には倒れた人影があるように思える。

まだ、そんなに遠くない。

あたしは靴と靴下を脱いで、海に入った。

海は怖いけど、大丈夫、しばらくは遠浅で、歩いていけるはず。

転びそうになりながら、あたしはボートにむかって歩いて行った。浅瀬が続くと言っても、しばらく進んだら腰のあたりまで水につかってしまった。制服を脱いだほうが良かったかもしれないけど、水着があるわけでもないし、さすがに無理がある。

ボートに追いついたときには、もう胸まで海の中だ。

それから、船べりを掴んで、浜へと引っ張る。波にさらわれそうになりながら、何度も潮を浴びて、最後には全身びしょ濡れだった。引きあげたボートを覗きこめば、そこには先輩だったものが横たわっている。

学校の制服を着ているから、先輩で間違いない。

でも肌は水を吸って膨れ、まだ人間の形は保っていたけれど、ぶよぶよとしてとても生きているようには見えなかった。顔だって、もう変わってしまっただれだかわからないくらい。

さっきまで、あたしと話をしていたのに。

あたしの手を握ってくれていたのに。その手はふやけて、きつといま触ったらぐちゃりと崩れてしまう。

先輩は本当は、半年も前に溺れて死んだから。

「先輩」

来ないでほしいと言ったとき、たぶん先輩は、この姿を見ないでほしいという意味で言ったんだと思う。

ごめんなさい、先輩の頼みを聞くことが出来なくて、ごめんなさい。

でもあたしは、どうしても最後にもう一度だけ先輩とキスがしたかった。形が変わっててもいい、まだ先輩の唇がどこにあるのかわかるから。

「先輩、好きです」

そしてあたしは、キスをした。

先輩の唇は冷たくて、それは、あたしの知っている先輩の唇だった。